

ジョイント栽培用ポット育成苗の定植方法

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

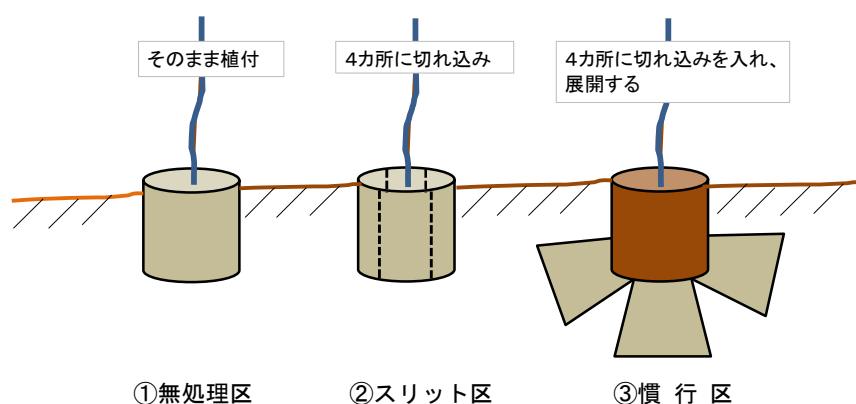
ジョイント用長苗の育成には容積 20L の不織布ポットを使用する。慣行法ではポット側面にスリット（切れ込み）を入れ、側面を展開した状態で定植するが、10a 当たり約 200 ポットの展開作業は重労働かつ時間を要するため負担が大きい。そこで、省力かつ慣行法と同等の樹体生育、果実品質が維持できる植付け方法を検討する。

(2) 情報・成果の概要

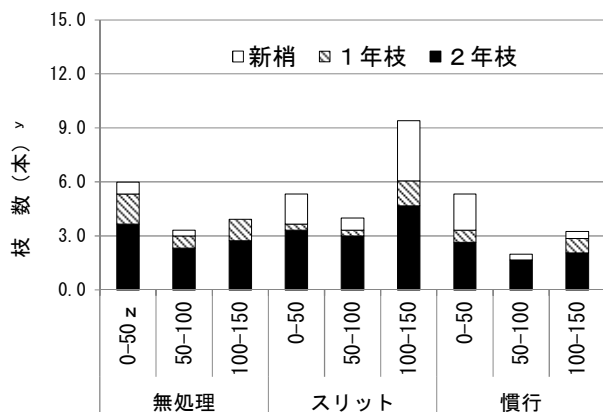
ポット側面にスリットを入れて定植すれば生育は慣行法と同等以上で省力的である。

2 試験結果の概要

- 1) ‘幸水’ 2 年生長苗を 9 樹使用し、2013 年 2 月に第 1 図のような 3 方法により定植した（第 1 図）。3 樹を 1 つの処理区とし同年 3 月にジョイントをおこなった。
- 2) 定植 4 年後の側枝数（1 年枝、2 年枝）は、無処理区とスリット区で差がなく、展開区でやや少なかった。新梢数は、スリット区で最も多くなった（第 2 図）。
- 3) 枝長は、主枝基部から 100cm までは処理間で大きな差がなかったが、先端部（100～150cm）はスリット区において新梢部が長くなった（第 3 図）。
- 4) 果実品質について、展開区の果重がやや小さくなった以外は処理間で大きな差は認められなかった（第 1 表）。
- 5) 根は無処理区ではポット外に出る根はごく僅かで、スリット区は切れ込みから四方に伸長し、慣行区は四方八方に根の広がりが見られた（第 4 図）。
- 6) 以上の結果、果実品質においては処理間で大きな差がないことから、地上部の生育と作業性を考慮するとスリット区が最も良いと考えられた。

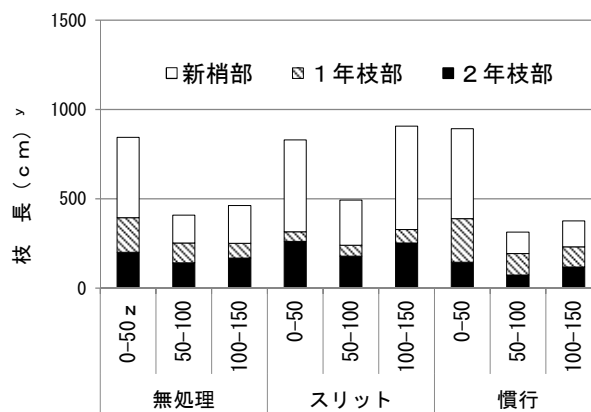


第 1 図 各処理区の定植方法



第2図 定植方法の違いが枝数に及ぼす影響

Z: 図中の0-50、50-100、100-150は主幹からの距離 (cm)
y: 主枝50cm当たりの各枝齢の枝数



第3図 定植方法の違いが側枝長に及ぼす影響

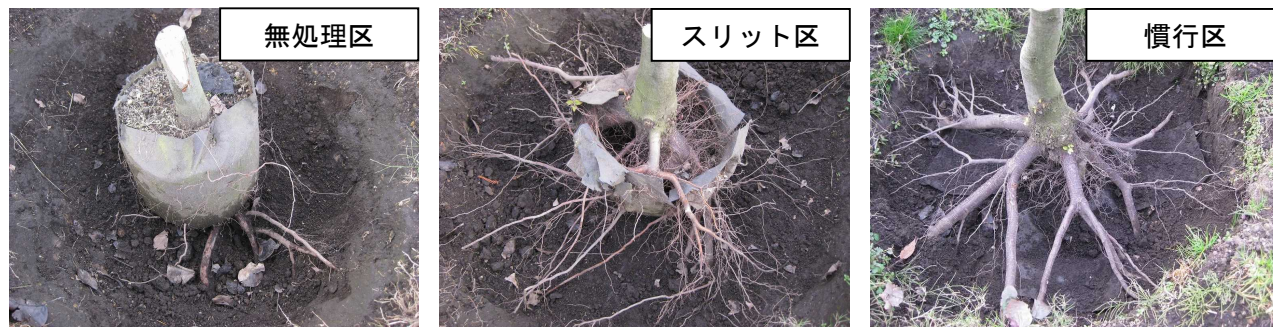
Z: 図中の0-50、50-100、100-150は主幹からの距離 (cm)
y: 主枝50cm当たりの各枝齢部の長さ

第1表 植え付け方法の違いが果実品質に及ぼす影響 (2016)

処理区	果重 g/果	果色 ^z c. c.	糖度 ^y °Brix	変形果率 %
無処理区	339	3.6	11.7	37.0
スリット区	333	3.8	12.1	42.3
慣行区	318	3.7	11.8	36.7

z: 農林水産省果樹試験場監修の‘幸水’ (地色) 専用カラーチャート値

y: ATAGO社製 DBX-55使用



第4図 定植方法の違いが根の伸長に及ぼす影響

注) 定植4年後に掘りあげて調査

3 利用上の留意点

- (1) 直径1m、深さ40cm程度の植付け穴を掘り、必要に応じて土壌改良資材を投入してから、深植とならないように植え付ける。

4 試験担当者

果樹研究室 主任研究員 井戸亮史
果樹研究室 室長 池田隆政